これからの家庭科教育

新学習指導要領の全面実施から四年目に入りました。梶田叡一先生、筒井恭子先生に、家庭科教育の現状をふまえ、あるべき姿とこれからの展望を語っていただきました。

文部科学省初等中等教育局教育課程課教科調査官・
国立教育政策研究所教育課程研究センター教育課程調査官
筒井 恭子

人間教育研究協議会代表・学校法人聖ウルスラ学院理事長・
奈良学園大学学長
梶田 叡一

梶田 叡一

かじた えいいち＊松江市に生まれ、米子市で育つ。京都大学文学部哲学科（心理学専攻）卒業。文学博士。国立教育研究所主任研究官、大阪大学教授、京都大学教授、京都ノートルダム女子大学学長、兵庫教育大学学長などを歴任。この間、中央教育審議会副会長、教育課程部会長なども務める。著書に『和魂ルネッサンス』（あすとろ出版）、『教師力再興』（明治図書）、『教育評価』（有斐閣）、『基礎・基本の人間教育を』『教師・学校・実践研究』（金子書房）、『不干斎ハビアンの思想』（創元社）など多数。

筒井 恭子

つつい きょうこ＊石川県生まれ。富山大学教育学部卒業。石川県内の公立中学校・高等学校教諭、石川県教育委員会小松教育事務所指導主事、公立小学校教頭を経て、平成21年から現職。著書に、『小学校家庭科の授業づくりと評価』（明治図書）、『新評価規準を生かす授業づくり小学校編4』（ぎょうせい）など多数。

体験と言語活動

梶田 新しい学習指導要領になって四年目になりますが、新しい家庭科の趣旨が全国的に根づいてきていますか。現状はどうでしょうか。

筒井 各ブロックの研究大会や全国大会で優れた実践が紹介されるようになったと思います。

梶田 授業のあり方としては言語活動が入ってきましたが、そのあたりはどうですか。

筒井 家庭科では、実践的・体験的な活動を通して、生活の中のさまざまな言葉、例えば、「炊飯」「沸騰」「かさが減る」「布を裁つ」などに触れ、驚きや感動を味わい、その過程で一つひとつの言葉を、実感を伴って理解することを大切にしていますが、授業では、体験そのものが目的になりがちです。

梶田 体験することはとても大事ですが、体験の経験化という、自分の体験を言葉で整理してみることも大事になりますね。

筒井 体験を通してわかったことや考えたことを言葉や図表でまとめ、説明したり、交流したりする活動が重要だと思います。例えば、ガラス鍋でご飯を炊く場合、子どもたちは、沸騰する水の様子、米の変化、ご飯の炊ける匂いやこげる匂いなどを自分の言葉でまとめ、グループで話し合う中でいろいろなことに気づきます。話し合ったことを言葉や絵でまとめ、学級で発表し合い、それらを子どもと先生で確認しながらまとめることにより、子どもの中に炊飯という概念が形作られます。このような活動によって体験と言葉が結びついて実感を伴った学習が可能になると思います。

梶田 私も、小学校の頃、家庭科の時間だけに使うノートを持たされて、ほうれん草のおひたしを作ったり、布を切って小さな袋物を作ったりしました。

筒井 製作においても「なぜ、そのようにするのか、どうしたらよいのか」などを考えることが大切です。例えば、袋の製作では、布の大きさを考えるとき、余裕をもって出し入れするためにはゆとりが必要なこと、できあがりの大きさに縫い代を加える必要があることなどを実感を伴って理解できるようにします。新聞紙や不織布などを使って試行錯誤する体験を通して、納得するまで学ぶ経験をすることが応用する力をつけることにつながります。作るプロセスを考えることが重要だと思います。

梶田 作ったものを図解して、絵で描いて、気づいたことやこだわったことを文章で書いたことを懐かしく思い出します。

筒井 考えたことを図に表し、できあがりをイメージすることは創造性を育むことにもつながると思います。

教科目標をふまえた指導の充実

梶田 小学校の家庭科では、基本的には衣食住と家族生活になっていますが、時代が変わってきて、子どもに気づかせたい中身も変わってきていますね。

筒井 家庭科では、家庭生活を対象として、生活を営むために必要な資質・能力を実践的・体験的な学習によって、実感をもって体得させることを大切にしています。

子どもたちは、日常の生活について無意識に過ごしています。毎日の生活がどのように営まれているのかを実感することから学習が始まります。例えば、食卓に並んでいるみそ汁がどのように調理されたのかには関心がなかった子どもも、煮干しでだしをとる、実として大根、油揚げ、ねぎを入れるなど、みそ汁について学習すると、その作り方や材料の栄養などにも関心が高まり、次々に知識を獲得していきます。固かった大根は、煮ることでおいしく食べやすくなることがわかり、「調理すること」の意味を学びます。友達と一緒に初めて作ったみそ汁の味は、これまでいちばんおいしいと感動します。

梶田 大感動ですよね。

筒井 自分たちでおいしいみそ汁ができたという喜びや満足感が積極的に家庭生活に関わりたいという意欲を引き出し、やればできるという自信につながります。また、おいしく食べるためにみそを入れるタイミングまで気を配り、準備してくれた家族に感謝の気持ちをもつことにもつながります。

梶田 一つのきっかけから、大きく成長していくわけですね。

筒井 今回の改訂では、教科目標について、これまでの「家庭生活に関心を高める」を、「家庭生活を大切にする心情をはぐくみ」と改めています。これは、家庭生活への関心を高め、衣食住などの生活の営みの大切さに気づくことを重視したものです。

家庭科には四つの内容があり、内容「A家庭生活と家族」の中に「自分の成長と家族」の項目を設定しています。自分の成長を自覚すること、家庭生活に関心を高めて生活の営みを大切にする意欲や態度を育てることを重視しています。二学年間を通して自分の成長を実感できるような授業づくりをしてほしいと思っています。自分でできることが増えた、家族の一員としてこんなことができる、「してもらう自分」から、「できる自分」に成長していることを実感できるようにする

こと、「自分の成長」が二学年間の学習全体を貫く視点となっています。

梶田　自分への気づき、自分が当たり前にやっていることをもう一度捉え直して整理してみることで、自分の成長、発達も見えてくるし、課題も見えてくるということですね。

筒井　子どもが家庭生活を改めて見つめ直すことによって生活の中の課題に気づき、身につけた知識や技能を生かして自分で考え、解決する活動が重要です。

家庭との連携の中で

筒井　全国小学校家庭科教育研究会の全国調査（※1）によれば、家庭科で学んだ知識や技能は、内容によっては家庭で活用されていますが、家庭生活をよりよくするために十分活用されていないという状況も見られます。また、この調査では、「家庭科の学習は好きですか」「家庭科の学習は家庭での生活に役立っていると思いますか」の問いに対しては、いずれも八割以上の子どもたちが肯定的な回答をしています。子どもたちの実態に合わせて、家庭科が「好き」「役に立つ」という思いを生かした授業を教師が工夫し、学んだ知識や技能を活用できるようにしたいものです。また、学習したことを家庭生活に生かし、実践できるようにするために家庭との連携を積極的に図る必要があります。

梶田　学校で学んだことを家でも試すことが第一段階ですね。

筒井　家庭との連携を進めるためには、例えば、家庭科の学習のねらいや内容について、授業参観や学級便り等を通して情報を提供し、家庭科の学習の意義や内容を伝えるようにします。

梶田　このお便りが大切ですね。

筒井　今回の改訂では、第五学年の最初に、二学年間の学習の見通しをもたせるためのガイダンスを設定しています。家庭科の学習内容について保護者の理解を深めるために、ガイダンスの授業を参観日に行うことなども考えられます。

　二学年間の限られた時間数の中では、何度も調理実習を行うことは難しいため、家庭の協力を得て、日常生活や長期休暇中に実践することも必要だと思います。学習した知識や技能を生かし、自分の考えを働かせて工夫する体験を繰り返す中で、実生活に生かすことのできる知識や技能が身についていくと思います。例えば、野菜をいためる場合、材料や火力などの条件に応じて調理することが求められます。工夫して野菜いためを作る、その繰り返しによって確かな知識や技能を身につけることができると思います。

梶田　家庭の協力が必要ですね。

筒井　全国調査の保護者アンケートでは、「子どもが家庭科で学んだことを家庭で実践する意義」について、保護者は、「生活の自立のための技能を身につけることができる」「子どもとのコミュニケーションを図ることができる」「家庭生活や家族への関心が高まり理解が深まる」などを挙げています。例えば、親子で一緒に料理を作ると会話が増えます。おばあちゃんのために柔らかくゆでたり、小さい弟のために細かく刻んだり、ちょっとした工夫が家族に喜ばれます。自ら考え実践したことが受け入れられ、評価されたときに、楽しさや充実感を味わうことができ、家族と協力して家庭生活をよりよくしようとする意欲につながると思います。

※1　全国小学校家庭科教育研究会　平成25年度「全国調査のまとめ」

梶田　家庭との連携がキーになります。学校の先生による家庭への働きかけ、啓発が大事です。

筒井　四年生までは、お手伝いとしてやっていたことも、家庭の仕事として実践しようとする意欲を高めていくことが大切です。例えば、忙しい家族に代わって朝食の準備をするなど、自分が家族にどういう協力ができるのかを考えさせることが大切です。

梶田　家族の一員として自分に可能な役割を果たすことですね。

問題解決的な学習の充実

筒井　子どもたちがこれから生きていく間に、生活場面で直面するさまざまな問題を解決するためには、問題解決のプロセスを身につけるということが大切です。そのためには、各題材を通して、繰り返し問題解決を経験する必要があると思います。そして、家庭生活を見つめて振り返り、その中にさまざまな問題があることに気づかせます。自分の生活の課題だと気づくことで解決したいという主体的な活動が生まれてきます。

梶田　子どもが問題意識をもつようにもっていくことで、ある種の必然性をもつ課題を子どもに意識させなければいけないのですね。それを家庭科の中でどのようにして実施するか、だと思います。

筒井　題材によって課題のもたせ方を工夫する必要があると思っています。例えば、掃除などの場合は、それぞれの家庭によってやり方も違いますから、一人ひとりが問題を見つけて、異なった課題を設定しやすい題材です。子どもたちが、それぞれ課題をもって学んだ知識や技能を生かして解決することができます。しかも、家庭での実践にもつながりやすいと思います。

　ところが、炊飯のような題材では、実生活では炊飯器で炊いていますから、課題を設定しにくいことがあります。炊飯のような題材の場合は、なぜ、そういう炊き方をするのかをみんなで一緒に考えて価値観を形成していくことが大切だと思います。そうすると、お米に対する興味・関心が高くなって、さらに柔らかくご飯を炊くにはどうしたらよいかなど、新たな追究課題を見つけることができます。

　いずれの場合にもなぜそれをする必要があるのかをきちんと考えさせることが大事だと思います。日常生活で毎日実践されている掃除のような題材でも「なぜ」がないと宿題だったからやった、で終わってしまい、継続しません。なぜ、しなければならないのかをきちんと取り上げ、価値観を形成して生活文化の継承につなげることが求められていると思います。

梶田　「なぜ」にこだわらせることはとても大事ですね。

伝統文化と家庭科

梶田　今回の学習指導要領の改訂では、全教科にわたって伝統文化を大事にしようということが盛り込まれました。例えば、正月の

おせち料理をどう考えさせるか、七草粥（ななくさがゆ）をどう考えさせるか。これもまさに、「なぜ」がないといけません。昔から伝統的に、かまぼこや黒豆が入っていたり、雑煮でお餅を食べたりしますが、そこで子どもたちが、なぜだろうと考えだしたら食文化の伝統についての気づきにつながります。

筒井　小学校では、ご飯とみそ汁について学習します。ご飯、みそ汁、箸などを配膳するときにわが国の伝統的な配膳の仕方があることを学びます。みそ汁ではだしをとることなどを学びます。また、季節の変化に合わせた快適な住まい方では、例えば、夏を涼しく住まうために、すだれをつったり、打ち水をしたりする生活の知恵を知り、日光や風など、自然の力を効果的に活用する方法についても考えます。

　このような学習を通して、子どもたちの日本の生活の仕方への関心が高まります。これからはグローバルに生きる力が求められます。海外に留学したり、仕事をしたりすることもあると思います。自国の文化や伝統、自分たちの地域について知ることが大切だと思います。

梶田　日本的な食べ物、暑さ寒さのしのぎ方などは、日本人の生理的な特徴にもいちばん合った方法が伝わってきています。これこそがまさに文化です。

これからの指導で充実させたいこと

梶田　こういうことも扱いたい、こういう活動もしたらよいといった、これからの小学校家庭科の夢についてはいかがですか。

筒井　今回、現代の消費生活が環境と深く関わっていることから、消費生活と環境に関する学習を一つにまとめ、内容「D身近な消費生活と環境」を設定しています。あふれる物の中から、目的に合った品質のよい物を選ぶ力は重要だと思います。購入する物の表示やマークなどの情報を集め、整理する技能も必要になってくると思います。

　また、自分の生活が身近な環境に与える影響に気づき、主体的に生活を工夫できるようにすることが求められています。自分の生活の快適さばかりではなく、周りのことにも配慮して価値判断をすることも大切だと思っています。

梶田　あふれている物の中からどれを選ぶか、選ぶ目のつけどころは何なのか、選ぶときの見方・考え方は衣食住全てに関わりますね。

筒井　家庭科は全ての人が主体的に生きていく力をつけていくことに関わる教科だと思います。生涯にわたって、心身ともに健康で安全な食生活を送る基礎となる力を養うために、小学校では、食習慣や栄養・調理に関する知識・技能を身につけることが大切だと思っています。

梶田　最後にこれだけは言っておきたいことがありますか。

筒井　家庭科では、生活を創意工夫する能力の育成を目指して、従前から問題解決的な学習を重視してきました。問題解決的な学習では、課題を解決するための計画を立てて実践し、それを実践報告会として交流し合う授業が多く見られます。この実践報告会では、発表してみんなで拍手して終わるのではなく、互いの実践を認め合い、課題を出し合ってアドバイスし合うことが大切だと思います。それがもっと工夫してみようという意欲につながります。このような、次の問題解決につなげるステップを確実にすることが実践力を高めるポイントだと思います。

　また、言語活動の充実と関わって、何を解決策として選び、実践してどうであったのかをきちんと説明し、友達と評価し合うことなども大切だと思います。言語活動と問題解決的な学習をいっそう充実させて、子どもたちに生活を創意工夫する能力が育まれることを期待したいと思います。

梶田　家庭科は、子どもが大きくなって自立した生活をするうえで必須の重要性をもっています。もっともっと家庭科の重要性が理解されなくては、と改めて思いました。

　本日は、示唆に富むお話、ありがとうございました。（編集部）

子どもたちの基礎学力と思考力向上を考えて

夏からのアイテムで学力の定着と伸長を

筑波大学附属小学校
算数研究部 / 著

「活用問題」で思考力を

山本　良和　（やまもと・よしかず）

新学習指導要領のキーワードである「活用」。新「アイテム」では，各単元において習得・活用・探究を意識した紙面構成とするだけではなく，3年〜6年では，巻末に「活用問題」の特集頁を設けました。既習の学習内容のうち，何の知識や技能を，あるいはどんな考え方を用いればよいかということを考えさせる問題です。中には，生活場面や他教科の内容に関する表やグラフから事象の傾向を読み取るような問題も用意しました。これらの問題を通して，諦めずに解決まで取り組もうとする態度，すなわち「活用しようとする態度」の育成も目指しています。

「授業でわかる!」で算数的活動を

盛山　隆雄　（せいやま・たかお）

「アイテム」には、子どもが「算数は楽しい」、「算数は面白い」と感じるような算数的活動のアイデアがつまっています。「授業でわかる！」のページでは、算数的活動に使える面白教材が具体的に紹介されています。授業展開の仕方もわかるので、実際の授業にそのまま生かすことができます。子どもが喜ぶだけでなく、先生も授業力をつけることができる内容なのです。子どもは本質的に活動性に富むものです。そうした子どもの本性に根ざす算数的活動を取り入れることによって、楽しい算数の授業を創造することが大切です。

「ホームワーク」としても

中田　寿幸　（なかた・としゆき）

「アイテム」の各ページには計算ドリルがついています。単元の初めの２ページは書き込みを可能にしたゆったりドリル。習い始めのときには、時間をかけて確実にマスターさせたいものです。単元の後半の２ページは、問題量を重視したきっちりドリル。トータルでは市販の計算ドリルと同等の問題数を確保しました。今回、新しく家の形の「ホームワークマーク」をつけました。これは授業の中で取り組んでもいいですし、自主学習や家庭学習用としても活用できるようにと考えました。家でも学校でも、考える力から計算の力まで、「アイテム」１冊あれば算数の力がついていきます。

1年〜6年　各970円（税込）

様々な問題に触れる機会を

大野　桂　（おおの・けい）

アイテムは、授業だけでなく、家庭学習を充実させることも考えて構成されています。各ページに「ホームワーク（宿題）」が記された家庭学習用の問題が設定してあり、授業で学習した内容を、家庭でも振り返ることができるようになっています。アイテムは、授業と家庭学習の一体化が図れ、確実な学習内容の定着に効果的です。

４つのステップを上手に活用

夏坂　哲志　（なつさか・さとし）

学んだことを様々な問題場面で活用することによって、より深い理解を得ることができます。また、他の学習内容と関連付けることによって、新しい知識や技能を獲得していくときに生きて働く力になります。「アイテム」は、①「練習しよう」（導入）、②「たしかなものにしよう」（習得）、③「活用する力をつけよう」（活用）、④「チャレンジしよう」（探究）の４つのステップで構成されています。③や④には少し難しい問題もありますが、子どもたちがこのような問題に挑戦してみることによって、学びがより豊かなものになっていくことを願っています。

「計算ドリル」と「チェックテスト」

田中　博史　（たなか・ひろし）

「ドリルもきちんとやらせたい」「考える力をつけるための問題もしっかりとさせたい」「しかし、現場では予算が少なくてどちらも追うことは困難だ」。「アイテム」はこんな現場の先生方の声をくみ取り、その全てを盛り込んで作った欲張りな問題集です。今回は全員にやらせたいドリルは書き込み式にし、問題数の確保と負担感の軽減の両方を実現。また、ペーパーテストの代用にもなるようにチェックテストを追加。それも単元途中でもできるようにと改良しました。このアイテムが全国の子どもたちの確かな力を育むことに役立つことを願っています。

領域別に配列された単元構成

細水　保宏　（ほそみず・やすひろ）

「アイテム」の3〜6年では、学習領域ごと（「数と計算」「図形」「量と測定」「数量関係」）に各学年の内容が整理されています。ですから、単元のどことどこが、どうつながっているかを理解させるのに役立ちます。学習内容の系統性がわかりやすいということは、子どもたちにとって予習がしやすいということも意味します。特に各単元の最初にあるテーマ（解説）では、学習内容の要点がうまく整理されているので、新たな学習内容でも、子ども自身で見通しを持って取り組むことができます。領域別であることは、学習したことを振り返るときにも有効な構成です。

アイテムの詳細は、本機構ホームページにてご確認ください。
また、ご審査用見本のご請求も承ります。お気軽にお問い合わせください。

http://www.next-edu.or.jp　アイテム算数　検索

TEL 03(3304)5314
FAX 03(3304)5316

「アイテム」算数
・1年 A4判（120ページ）
・2〜5年 A4判（128ページ）
・6年 A4判（136ページ）
学校納入価格　各970円（税込）

企画　特定非営利活動法人 次世代教育推進機構 for Education of Next Generation
発行　教育開発出版株式会社